

Wesley Hall News



2005 青山学院
クリスマス・ツリー点火祭
(青山キャンパス)

青山学院スクール・モットー

地の塩、世の光
The Salt of the Earth, The Light of the World

(新約聖書 マタイによる福音書 第5章13～16節より)

No. 86

2005. 12. 5.

特集 クリスマス

説教 「祝キリスト・フェスト」

- | | |
|---------------------------------|------------|
| ●「クリスマスを迎える」 | 西田恵一郎 … 2 |
| ●「初等部のクリスマスカード」—作品づくりの実際— | 生沼 晴美 … 4 |
| ●クリスマス・キャロルいまむかし | 飯倉 穂高 … 6 |
| ●青山学院資料センター所蔵のキリスト教貴重文献・史料 その13 | 那須 輝彦 … 8 |
| ●三年目を迎えた相模原キャンパスの点火祭 | 氣賀 健生 … 10 |
| ●私の教会 カトリック関口教会 | 伊藤 悟 … 12 |
| ●宗教センターだより | 林 謙二 … 13 |
| ●宗教センターだより | …………… 14 |

説 教

「祝クリスト・フェスト」

マタイ1章20,21節；ルカ1章35～38節

西田 恵一郎

中等部 宗教主任



ドイツのプロテスタント教会ではクリスマス
を「クリスト・フェスト」＝「キリスト祭」と呼ぶ
そうです。英語の“Christmas”は“Christ”（キ
リスト）と“Mas”（祭り）を合わせた語です。つ
まり、クリスマスはキリストのお祭りです。で
は何を祝うのか。もちろん、イエス・キリスト
の誕生を祝うのです。クリスマス・シーズン中
のアメリカのスーパーマーケットや文房具店で
は、「ハッピー・バースデー・ジーザス」と印刷
された、たくさんのクリスマス・カードが店頭
に並んでいるのを目にします。近年、日本でも、
当然のこととしてクリスマスが祝われますが、
多くの人々はクリスマスがイエス・キリストの
誕生を祝う日だと知らないままに、イベントに
忙しくしています。

しかし、クリスト・フェストは「今日ダビデ
の町で、あなたがたのために救い主がお生ま
れになった。この方こそメシアである」（ルカ
2:11）ということを確認する時なのです。クリ
スマスはイエス・キリストという名の人が生ま
れた、ということに留まらないのです。「イエス」
（ヘブライ語で「イェホシュア」＝主は救い）、
「キリスト」（ギリシア語で「クリストス」＝救い
主、油を注がれたもの）という名前が示す通
り、人類の救い主、メシアがこの世に到来した、
という一大事が起こった日なのです。

では、このメシアは人間を何から救う方だっ
たのでしょうか。「救う」はギリシア語で「ソー

テール」で、「神々、支配者」の意味で使われてい
ました。イエス様がお生まれになった2000年
前、パレスチナに住むイスラエル人はローマの
圧制に苦しんでいましたから、「メシア」と聞き、
当時の皇帝アウグストゥスに代わる王として期
待したかもしれません。イエスの中に政治的・
軍事的な救世主を求めたことでしょう。しかし、
聖書は民が期待していたような政治的また軍事
的な救世主ではなく、罪からの救世主としてイ
エスは生まれたと記しています。「マリアは男の
子を産む。その子をイエスと名付けなさい。こ
の子は自分の民を罪から救うからである」（マ
タイ1:21）と語っている通りです。

「罪」とは何でしょうか。イザヤ書59章2節
に「お前たちの罪が神の御顔を隠させ、お前た
ちに耳を傾けられるのを妨げているのだ」とあ
るように、罪は神様との関係を前提としてお
り、その関係の破綻を意味します。ルカによる
福音書に記されている放蕩息子のたとえの中
で、彼は「お父さん、わたしは天に対しても、
またお父さんに対しても罪を犯しました。も
う息子と呼ばれる資格はありません」（15:21）
と告白しています。自分の我を通したために、
父親との関係が破壊されてしまった。関係の破
綻、これが罪なのです。単なる内的・良心的罪
責や道徳的・社会的不正義と同じではないので
す。ある神学者は、罪を「過度の自己愛にある」
と言いました。「思い通りに事を運ぶ」「自分が

一番大切「自分しか頼れない」という心のことでしょう。イエス様は神様との壊れた関係を修復し、神を神とも思わず、人を人とも思わず、自分さえよければそれでよいという過度の自己愛から人間を解放するためにお生まれになったのです。

「罪」には「的はずれ、目標を失い、道から外れる」という意味があります。見失った目標を回復し、外れた道から正しい道に戻らない限り、どんなに力んでも、頑張っても、「これでいいんだ」という安心感や充実感を得ることはできません。むしろ、頑張れば頑張るほど、そして力めば力むほど、つまり「自分が自分が」と自分が中心になり、神様を人生から締め出す時に苛立ち・あせり・怒りなどで心が一杯になるものです。必要なのは、見失った目標を回復し、外れた道から戻ること、つまり罪の解決です。そのためにはイエス様を心に迎え入れ、人生の主役の座をイエス様に譲ることが必要ではないのでしょうか。

わたしは幼稚園に上がる前に溺れて死にかけたことがあります。海草に足を滑らせて海に落ちたのですが、水中で、もがけばもがくほどどんどん沈んでいくのです。子供ながらに「もうだめかも」と思いました。その瞬間、誰かがわたしの髪の毛をつかんでぐっと引っ張り上げてくれました。今まで、わたしたちは頑張れば何とかかなると思ってきたかもしれませんが、また何とかなってきたのかもしれませんが、しかし、人には、自分自身を罪から救う力は無いのです。誰かに救ってもらうしか道はないのです。その誰かこそ、イエス・キリストなのです。

クリスマスが来るたびに思い出す話があります。ご存知の方も多いでしょう。それは、アメリカのある村の白い小さな教会での出来事でした。その年も教会では、子供たちによるクリスマス・ページェントが行われることになりました。ひとりの知的障害をかかえた男の子も役を

もらいました。役がもらえた少年は大喜びでした。宿屋の主人の役です。―「だめだ。部屋がない。」長旅に疲れきったマリアとヨセフに向かって、そう言うと、後ろを振り向いて、馬小屋を指差す一男の子は、何度も何度も練習しました。そして、いよいよ本番です。彼の台詞が終わり、彼の両親がほっと胸を撫で下ろした時でした。トボトボと歩くマリアとヨセフの後ろ姿を見ながら、少年は突然泣き出したのです。そして、二人の後を追いついて言ったのです。「マリアさん、ヨセフさん。馬小屋に行かないで。馬小屋は寒いから、イエス様が風邪を引いちゃうよ。馬小屋に行かないで。僕の部屋を使っていいから。」

ページェントは、そこで中断され、出来ばえとしては今までで最低のページェントとなりました。しかし、この年ほどクリスマスの本当の意味が問われたページェントはなかったのです。「神は独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内を示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります」(ヨハネー4:9～10)。これこそ、クリスマスの本当の意味ではないのでしょうか。

わたしたちは、ページェントを見るように、イエスの誕生物語を、2000年前に起こった出来事として、一人の観客・傍観者として見ているのでしょうか。それとも、「ここに愛があります」というメッセージを自分に宛てられたものとして聞いているのでしょうか。イエスの誕生物語は、欲や都合など自分のことだけで一杯になった心の部屋を明け渡し、「僕の部屋を使って」とイエス様をお迎えすることを現代のわたしたちに勧めている物語なのではないのでしょうか。

「クリスマスを迎える」

生沼 晴美
幼稚園教諭



幼稚園の庭で実った柿やみかん、ぎんなんの実を収穫して味わい、遠足に出かけて秋の自然を満喫すると、幼稚園では収穫感謝の礼拝をもち、多くの恵みを与えて下さる神様に感謝し、その喜びを分かち合う時をもちます。そして、神様への感謝のうちにクリスマスを迎える準備が始まります。私たちは、子どもたちがクリスマスを迎えるときを、一年で最も大切な時と考えています。

教会暦では、クリスマス礼拝の三週前にあたる主日（日曜日）からアドヴェントが始まりますが、幼稚園では、毎年クリスマス礼拝の日（今年度は12月15日（木）をクリスマス礼拝としました。）からさかのぼり、教会暦に準じてクリスマス礼拝の三週前の金曜日をアドヴェントの始まりとし、毎週金曜日にアドヴェント礼拝Ⅰ～Ⅲを守ります。ご家庭でも、アドヴェントを特別な時として覚え、教会生活を大切にしながら、お子さまとともに心豊かに過ごしていただけるようにと願い、園から各ご家庭に（後述するような）クリスマスの意味やクリスマスを迎える子どもたちの活動の内容や願いなどを記したおたよりを配布しています。

さて、アドヴェントとクリスマスを迎える準備には色々なことがあります。まず、アドヴェントに入る前に、子どもたちはアドヴェント・カレンダーと献金箱を作ります。アドヴェントの期間に入ると、私たちは様々な活動を通して年長、年中、

年少それぞれの年齢に応じて、クリスマスの出来事を身近に感じ、喜びを深めていけるよう配慮しながら準備を進めます。子どもたちは聖書の話を通してクリスマスの本当の意味——クリスマスは、神様が私たちが愛し、すべての人が幸せになるために、神様のたった一人の子どもを人間の姿でこの世に遣わして下さった日であること、また、苦しみや罪から私たちが救い出してくださるイエス様の誕生を心から嬉しく思い、喜びに溢れて神様の大きな愛に感謝する日であること——を知っていきます。アドヴェント礼拝に参加する、讃美歌を歌う、クリスマスの絵本を読む、園内やクリスマスツリーの飾りを付ける、お家の方のためのプレゼントやキャロリングのお菓子を作る、ページェント（降誕劇）をするなどの活動一つひとつが子どもたちの楽しみになり、豊かな遊びにもつながって行きます。そのようなクリスマスの活動の中から、いくつかをご紹介します。

○アドヴェント礼拝とアドヴェント・カレンダー

アドヴェント礼拝では、聖書のお話を聞き、保護者の方々が演奏して下さるハンドベルの音色に耳を傾けます。アドヴェント礼拝の始まりには、子どもたちが「アドヴェント・クランツに」という讃美歌を歌い、司会者がアドヴェント・クランツのろうそくに灯をともします。ろうそくの灯りが毎週一本ずつ増えていくのを、子どもたちは心待ちにしています。

各クラスで作るアドヴェント・カレンダーには、幼稚園がアドヴェントに入った金曜日から毎日一つずつ、子どもたちの手作りの天使や羊、羊飼などが加えられていきます。一つ増えるとクリスマスに一日近づきますので、子どもたちは少しずつ近づくクリスマス礼拝の日を楽しみに待ちます。「あと何日でクリスマスかなあ」と指折り数えながら、「今日は誰のをつけるの?」「僕のはいつ?」



「明日は私をつけて！」という子どもたちの姿は微笑ましいものです。子どもたちが作るものには、その年によってテーマがあります。クリスマス礼拝の当日には、全学年の子どもたちの作ったものが一つの大きなアドヴェント・カレンダーとなり、幼稚園のホールに飾られます。ある年はイエス様のお生まれになった馬小屋に羊飼いたちが羊たちと共に集ってくる場面、ある年には羊飼いの住む野原の上空でたくさんの天使がイエス様の誕生を祝って讃美する場面など、毎年趣向を凝らしています。

○献金箱作りと献金

献金箱も、子どもたちの手作りです。毎年、空き箱や紙コップ、ペットボトルなどの廃材を有効利用して、クリスマスツリーの形であったり、馬小屋であったり、学年によって子どもたちと私たちとで工夫しながら楽しい献金箱が作られます。アドヴェントが始まると献金箱を家庭に持ち帰ります。

私たちは、献金は、神様が常に私たちを守ってくださること、神様が与えてくださるたくさんの恵みを覚え、感謝のしるしとして捧げるものであることや、嬉しかったこと、悲しかったことを思い出しながら、一日を守られて無事に過ごしたことを感謝して、また、病気や自然災害、貧困などの困難な状況にある方々に思いを寄せながら、毎日祈りつつ、ご家庭でもお父さまとともに献金を捧げていただきたいと願っています。そして、献金を捧げるために子どもたちが自分でできること（お手伝いをしたり、欲しいものを少し我慢したり…）をご家族でお話しながら、日頃頂いているたくさんの恵みを身をもって感じ、その一部を神様にお返ししていく良い機会となって欲しいと願っています。

アドヴェントに入ったある時、「今日ね、バスに乗らないで渋谷から歩いてきたんだ。バスのお金は献金するの」と話してくれた男の子がいました。また、「昨日お手伝いしたから、ママが献金を入れてくれたの」という女の子や、いつも食べているお菓子を減らして、献金をする子どももいました。「おばあちゃんが献金箱にお小遣いを入れてくれた」という子どももいて、それぞれの家庭で子どもたちが自分で出来ることを考えて実行したり、保護者や祖父母の方も共に献金をして下さっていることを嬉しく思います。そうして捧げられた献金は、クリスマス礼拝の中で一人ひとりがお捧げします。



○ページェント（降誕劇）

クリスマス礼拝は、全学年の子どもたちが献金を捧げてから始まります。年長組の子どもたちは、礼拝の中でページェント（降誕劇）を行ってイエス様の誕生の喜びを身体と心とで表現し、感謝の時をもちます。自分たちが登場人物に扮して演じるとなると年少組の時から繰り返し聞いてきたクリスマスの物語もより身近に感じられるようです。配役決めではもめることもありますが、どの役になった子どももそれぞれが神様を讃美する主役であることやお互いに応援し合うことで神様が喜んで下さることなどを伝えながら練習に励みます。練習が始まると、砂場で遊んでいても誰ともなしに讃美歌を口ずさみ、一緒に遊んでいる仲間が声を合わせたり、部屋の中にはイエス様の生まれた馬小屋ができて「僕がイエス様！」と寝そべっている子どもがいたり、普段の生活の中にもクリスマスを迎える喜びがあふれてきます。そうして迎えるクリスマス礼拝では年少組と年中組や保護者の方々も聖歌隊としてページェントに加わり、幼稚園全体で喜びの時を迎えます。

子どもたちにとって、クリスマスは楽しいイベントの時であるかもしれませんが、けれども、今は様々な活動をしながら楽しみに待つことが、やがて、長い間祈りつつ救い主を待ち望み、ついに大きな喜びを得た信仰者の姿につながる日を望みつつ、今年もクリスマスを迎えたいと思います。

「初等部のクリスマスカード」

－ 作品づくりの実際 －



飯倉 穂高

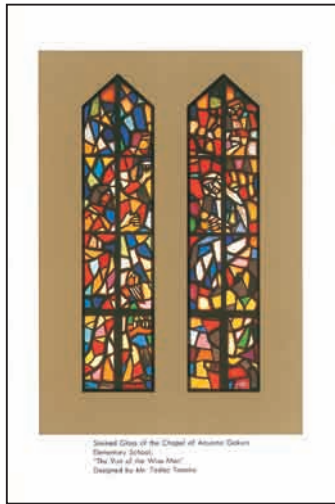
初等部図工科教諭

はじめに 初等部宗教主任 小澤淳一

12月に入りますと、学校やそれぞれの家庭にクリスマスカードが届く季節になります。届いたカードを眺めながら、送ってくださった方々を心に思い、クリスマスの喜びを分かち合う経験をどなたでも持っていると思います。

初等部では、今から12年前、オリジナルのク

リスマスカードを作ることが計画されました。最初に作られたカードは、初等部礼拝堂にあるイエス様の生涯を描いたステンドグラスを表紙としたものでした。この絵は、故田中忠雄画伯によって描かれたステンド



ンドグラスで、三人の博士の礼拝を描いたものです。

しばらくステンドグラスの絵を表紙としたカードが続きましたが、図工科の授業のカリキュラムにクリスマスを題材とした版画作成があり、その中大変優れた作品が多いので、児童の作品をクリスマスカードにするという取り組みが始まりました。当時の児童が描くクリスマスの題材には、子どもたちがイメージする様々な要素がありました。たとえば、サンタクロース、もみの木、飼い葉桶に寝ているイエス様……等々。これらの作品も、子どもの感性で捉えたすばらしいものがたくさんありました。

さらに、一步踏み込んで、図工科と宗教科(聖書科)が共同で制作をする取り組みを始めました。

具体的には、授業の最初に、宗教主任がクリスマスの物語を聖書から語り、またクリスマスを題材にした美術作品を児童と共に鑑賞し、それらに刺激を受けて、児童が作品に取り組むという試みでした。子どもたちは、聖書のみことばの印象を想像しながら絵を完成させ、具体的な作品へと仕上げていきました。

子どもたちは、このようなプロセスの中で、聖書に触れ、心に残ったものを作品へと作り上げていきます。そして、クリスマスの本当の意味を心に思いながら、作品と向き合っていきます。

全部で約120点の作品が完成しますが、残念ながら、クリスマスカードになるのは、その中の1点です。そのほかの作品は、幼稚園から大学までの関わりの中で行われている「Art・クリスマス・Aoyama」展で公開されます。

またこのクリスマスカードは、一般にもお分けしています。1部100円で、その収益は、クリスマス献金として、日本国内のキリスト教関連施設へ送られます。

以下にご紹介するのは、実際に行われている授業での取り組みとその様子です。

初等部から毎年クリスマスに発行されている「クリスマスカード」は、3年生の図工科の授業「クリスマス版画」において制作された作品です。約120点の中から毎年1点選出されます。以下にクリスマスカード誕生までの流れと子どもの様子について書きたいと思います。

■下書き1

クリスマスにはまだ早い、2学期10月頃から週90分の授業を約3回かけて取り組みます。まず始めに何を描くかを各自考えなければなりません。この際、子どもたちにはテーマが与えられて

います。テーマは大きく分けて4つ。【a. 受胎告知 b. 天使と羊飼い c. 3人の博士 d. イエス様の誕生】この中から自分はこれだというものを選びトレーシング・ペーパーに下書きをします。毎年この作業で私が大変驚かされるのは、授業の導入段階において、当然参考作品として過去のクリスマス版画作品を見せたり、国内や海外の画集・絵本をばらばらと紹介したりするのですが、なにより子どもたちの心に強く刻まれているのは、毎年2学期終業式の翌日に行われる、初等部のクリスマス讃美礼拝(ページェント)です。そのイメージを表現すべく子どもたちはいつも大変意欲的に下書きに取りかかります。

■下書き II

トレーシング・ペーパーに下書きが出来たら、今度は板にその絵を写します。転写にはカーボン紙を使います。この時、下書きは裏返しにして鉛筆でなぞり、板に写る絵は実際の下書きとは反対のものが出来ていなければなりません。しかし、上手く説明が伝わらず、そのまま写してしまう子がクラスに必ず1人はいるものです。それもご愛敬。かえって新鮮だったりして本人も気に入り、ねらいどおりなんて言ったりします。

■彫刻刀との出会い

この「クリスマス版画」は版画の中でも木版画という表現方法にあたります。およそA4版のシナベニヤに彫刻刀で線を彫り版にします。初めて使う彫刻刀。始めから上手に彫れる子もいればそうでない子もいます。少しずつ慣れながら、くるくると丸まった木の屑に小躍りしながら熱心に線彫りを進めている様子は、これが人が新しい道具と出会った時の喜びの瞬間なんだと思います。また一方で、夢中になるあまり軍手をしても誤って手をかすめてしまう時もあります。毎回ひやひやしていますが、子どもたちはなかなか遅しく絆創膏を貼ってすぐ作業に戻っていきます。

■難しい刷りの作業

どうにか彫り終わるとこれからがいよいよ本番、難しい刷りの作業に入ります。刷り方は一版多色刷りという方法です。ローラーで一色ゴロツと転がせば何枚でも刷ることが出来る一版一色刷りとは違い、ずれないように板と紙の上部をセロテープで留め、ひとつの版で部分ごとに違った色を筆で塗り分けます。ぱたんとめくっては、ばれんでこすり、ばれんでこすっては、ぱたんとめくるという大変手間のかかる方法です。そのかわり出来上がった作品はまぎれもなく世界に1枚だけのもの

です。たとえこすれてはつきりしないところがあっても、水が多すぎてにじんでいても、それはそれで何とも言えない効果に見えてくるから子どもの作品は不思議です。

■効果と完成

このクリスマス版画では、刷りの効果を最大に引き出すため最終的に黒い紙に刷ることにしています。夜の空に一番輝く星の光や、羽を広げて舞い降りる天使、誕生したばかりのイエス様の輝きなどなんと暖かく感じることができるからです。しかし、本当の意味で作品から伝わってくる暖かみや子どもらしい微笑ましさはどこからくるのか。完成した作品を前にいつも考えます。おそらくこの何でもデジタルの時代に、小さい手で慣れない彫刻刀を駆使し、汗こそかかないまでも「先生、ずっと握っていたら指が固まって曲がらなくなった。治る？」などと手を痛めながら時間をかけて制作した子どもたちの自信とクリスマスを思う気持ちの表れではないかと思うのです。

■「クリスマスカード」と発表の場

「クリスマスカード」は1点のみですが幸いにも「クリスマス版画」は多くの作品発表の場をいただいております。初等部ページェント用のパンフレット、「Art・クリスマス・Aoyama」展、初等部カレンダー(11・12月)。さらに今年は、学院広報室から発行されているAOGAKU Chimesの表紙にもなりました。

そして図工科ではなによりも3年生がそれぞれ家庭に持ち帰り、額に入れ飾って欲しいと願い伝えてきました。これからも多くの方々に子どもたちの暖かいクリスマス版画をみていただけたらと思っています。



クリスマス・キャロルいまむかし

那須 輝彦

大学文学部助教授



みなさんはキャロルと聞くとどんな歌を思い出されるでしょう。キリスト教の文化基盤をもたない日本では、師走になると、ママがサンタにキスしたり、トナカイさんが笑いものになったりする歌ばかりが巷に溢れますが、厳密にいうと、あれはキャロルではありません。いかにお祭り気分を満たした歌でも、その喜びが、救い主到来の喜びと感謝に根ざしたものでなければ、キャロルにはくれないわけです。

「キャロル carol」とは、本来、中世イギリスに興ったリフレインつきの歌で、その名はフランスの「カロール carole」という輪舞に由来します。つまり当初は、輪になって踊りながらみんなでリフレインを歌う舞踏歌だったのです。曲は単旋律から多くて3声部で、英語に合の手のようにラテン語を交えながら、キリストの降誕や聖母を讃えてゆきます。しかしこれは、教会の典礼で歌われる厳密な意味での教会音楽ではなく、教会の回りを巡る宗教行列や、市民が演じるページェント（聖史劇）、あるいは宮廷での降誕節の祝宴で歌われた、いわば準典礼的な宗教歌でした。それがキャロルのキャロルたる所以です。

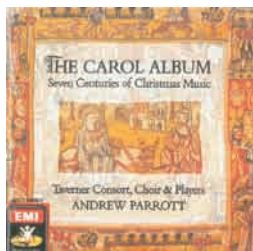
17世紀、ピューリタン革命で国を支配した厳格な清教徒は、クリスマスのお祭騒ぎを禁止。そしてキャロルを育んだ宮廷自体が無くなってしまいましたから、キャロルを歌う風習は一時衰退してしまいます。

19世紀になるとキャロル復興の気運が高まり、イギリス各地でバラッドのように細々と歌い継がれてい

た曲を楽譜に記録したり、他国の似たような民衆的宗教歌——フランスのノエルやドイツのヴァイナハツリート、ルター派の会衆讃美歌コラールなど——を翻訳したり、新作を編んだり、レパートリーの収集・拡充が行われます。《ひいらぎかざろう》(讃1129番)は、ウェルズで採譜された民謡ですし、《ティンドンほがらかに》は、実は16世紀フランスの舞曲に新たに歌詞をつけた19世紀イギリスの産物なのです。同様のことは讃美歌にもみられ、たとえばクリスマス讃美歌の定番中の定番《あめにはさかえ》(讃98番)も、メソジスト教会の創始者ジョン・ウェスレーの弟チャールズの詩に、ある教会音楽家がメンデルスゾーンの男声合唱曲の旋律を転用してこのカップリングが定着したわけで、これまたすぐれて19世紀イギリスの産物なのです。

こうしてヨーロッパ各国の伝統歌や新たな創作歌、讃美歌などを含めて、今日、私たちが漠然と「クリスマス・キャロル」と呼んでいるレパートリーが形作られました。その集大成が、ヴォーン・ウィリアムズも編纂に携わった『オクスフォード・キャロル集 The Oxford Book of Carols』(1928年)です。1992年には、さらにレパートリーを拡充すると同時に、できる限りオリジナルに近い姿で曲譜を掲載するという方針で改訂された『新オクスフォード・キャロル集 The New Oxford Book of Carols』が出版されました。

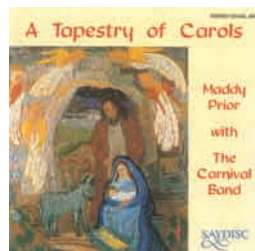
CDを紹介しましょう。まずは、他ならぬ『新オク



THE CAROL ALBUM
A. パロット指揮
タヴァナー・コンソート & 合唱団
英 EMI CDC7 49809 2



CAROL ALBUM 2
A. パロット指揮
タヴァナー・コンソート & 合唱団
英 EMI CDC 7 54902 2



A Tapestry of Carols
M. プライア &
ザ・カーニヴァル・バンド
英 SAYDISC CD-SDL 366

スフォード・キャロル集』の編纂者のひとりで、イギリスの指揮者・音楽学者アンドルー・パロットが実際にその収録曲を音にした『キャロル・アルバム』『キャロル・アルバム 2』の2枚。曲集の編集方針どおり、曲をオリジナルのスタイルで演奏することをめざしたものです。15世紀の元祖イギリスの3声キャロル、ショーム(オーボエの前身)やサクソバット(トロンボーンの前身)といったルネサンス楽器による《ティンドン》の原曲の舞曲、1818年オーストリアの村での初演どおりギターで伴奏した《聖しこの夜》(讃109番)、大バッハによる通奏低音をリュートで奏でた《優しくも愛らしき》(讃110番)、19世紀のメソジスト教会によくみられたチャーチ・バンド風にクラリネットやヴァイオリンを用い、訛った発音と粗野な発声であえて村びとたちの素朴な合唱の雰囲気を出したキャロル、メンデルスゾーンのオリジナル譜で歌った《あめにはさかえ》など、時代考証にもとづく趣向を凝らした演奏が繰り広げられます。残念なことに日本国内盤がないうえ、曲の収録が時代順ではないので混乱してしまうかもしれませんが、各曲ごとに添えられている短い英語の解説さえ読めば、とても興味深く聴けます。パロットにはさらに2枚、同様のクリスマス・アルバムがあります。

同じように古楽器を使いながら、まったく別の世界を創り出しているのが、マディ・プライア&ザ・カーニヴァル・バンドの『キャロルのタペストリ』。実はマディは「イギリス・トラッドの女王」の異名をとるフォーク畑のシンガーなのです。《もろびと声あげ》(讃102番)、《荒野のはてに》(讃106番)、《この日ひとと》(讃1126番)、《世の人忘るな》(讃1128番)などおなじみの讃美歌やキャロルが、あっと驚くゴキゲンなノリのトラッド・バンドとコブシの効いたマディの歌声で装いも新たに蘇ります。

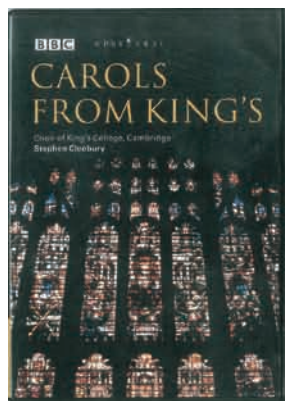
キャロルは、「クリスマスの喜びを歌ったりフレンツキの素朴な歌」という基本形を守りながら、今でも新作が書き続けられています。現代のキャロル作家としては、ジョン・ラッターの名を挙げないわけにはいきません。その作品は親しみ易く暖かく、良質の

ミュージカル映画を見ているような、幼い日々へのノスタルジーを聴くものに呼び起こします。ラッター自身が手兵のケンブリッジ・シンガーズを指揮したディスクが自前のコレギウム・レーベルから何枚も出ていますが、『クリスマスの朝 Christmas Day in the Morning』あたりからがいいでしょう。実はこれを書いている11月初旬時点では、今年の青山の点火祭でも、このアルバムに含まれている《スター・キャロル》を演奏する予定です。

ア・カベラがお好みの方には世界最高峰の男声六重唱団キングズ・シンガーズが歌った『クリスマス』がお薦め。男声六重唱といってもトップ二人はファルセットですから、サウンドは混声のようにカラフルです。彼らのレパートリーはポップにアレンジされていることが多いのですが、このアルバムでは中世起源の聖歌《久しく待ちにし》(讃94番)からラッターまで、キャロルの名作をオリジナルに近いアレンジで歌っています。端正な声で極上にブレンドされた完璧なハーモニーに浸る一時はまさに至福の一語に尽きます。

最後にDVDを。まさにそのキングズ・シンガーズ発祥の地、ケンブリッジ大学キングズ・カレッジでクリスマス・イヴに行われる『9つの朗読とキャロルの祭典』を取めた一枚。アダムとエバの墮罪からキリストの降誕までの人類救済の歴史を聖書の9つの個所の朗読でたどり、間にキャロルや讃美歌を歌ってゆくもので、この礼拝の放送によってキングズ・カレッジ聖歌隊が有名になったといっても過言ではありません。礼拝は《ダビデの村の馬屋のうちに》(讃469番)の少年独唱で始めるのが伝統になっていて、この讃美歌を無伴奏で歌い出す少年の声は、クリスマスのイメージとしてイギリス人の心に深く刻み込まれているのです。というわけで今年のクリスマス・イヴはこの

DVDで決まり!

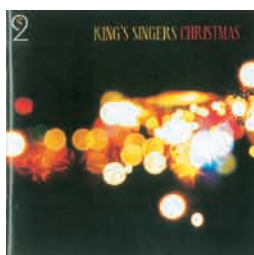


CAROLS FROM KING'S
(9つの朗読とキャロルの祭典)
S. クリーバリ指揮ケンブリッジ大学
キングズ・カレッジ聖歌隊
英 BBC DVD OA 0822 D

※これらのソフトは、日本のWebページでも容易に入手可及だと思います。



Christmas Day in the Morning
J. ラッター指揮
ケンブリッジ・シンガーズ
英 Collegium COLCD 121



KING'S SINGERS-CHRISTMAS
キングズ・シンガーズ
英 Signum SIGCD 502

氣賀 健生

大学名誉教授

青山学院資料センター所蔵貴重文献・史料紹介第13回。今回は主としてアメリカ・メソジスト教会の宣教にかかわる史料、及び初期日本メソジスト教会関係の諸史料を紹介しましょう。

まず“Gospel in All Land”。当資料室に1882～1901年の揃いがあります。これは1884年までは教派に関係なく、すべての教派の宣教誌として出版され、1885～86年版はメソジスト宣教局を中心として他教派を含む宣教機関誌として、そして1887年からは専らメソジスト宣教局の機関誌となっています。他に1880～83年の日本関係記事のみを、筆者がDrew大学構内にあるメソジスト史料館で収集したものが別冊としてあります。これは“Gospel in All Land”（「世界にあまねく福音を」）というタイトル通り、世界のあらゆる土地での宣教活動の実際の様子が活写され、この時代即ち19世紀後半のキリスト教宣教活動の熱意を窺い知ることができます。

次に“Tokyo Missionary Conference 1900”。これは日本に宣教を展開していたすべてのプロテスタント教派の宣教師が、1900年10月24～31日に東京で一堂に会した全記録です。全体で1048ページに及ぶ大冊ですが、特に附録として各教派ごとの日本伝道の拠点および各地方教会の詳細なリスト、および外国人宣教師にとって日本の事情について特に注意すべき諸点等が挙げられていることは、大変貴重かつ興味深いことです。更にVerbeck(フルベッキ)の手になる“History of Protestant Mission in Japan to 1883”（「日本における1883年までのプロテスタント伝道の歴史」）が収められていますが、これは日本の宣教史として非常に貴重なものです。

“Manual of the Methodist Episcopal Church”。1880年10月の第1号から1888年4月号まで完全揃いですが、北部アメリカ・メソジスト教会本部から出版されたもので、筆者も当資料室で初めて目にした貴重資料です。世界各地にわたるメソジスト教会の伝道状況が良くわかります。

“Japan Evangelist”。1894年の第1号から1921年までほぼ完全に揃っています。他に

1894年の欠号分については、Drew大学構内のメソジスト資料館で筆者がコピーしたものがあります。これは日本の明治・大正期のキリスト教事情の詳細を知る上で大変貴重な史料です。日本人の文章も沢山含まれています。

“Tidings from Japan” Vol.I (1898年1月～1898年12月)、Vol.VIII (1905)が所蔵されています。他にAlexander宣教師の令息夫人から寄贈されたものがVol.II～Vol.Vにわたってかなり収蔵されています。(Alexander宣教師<1862～1940>は30年余青山学院につくした。彼についてはいずれ『青山学報』でとりあげる予定)。これらとは別に上記Drew大学の資料館で筆者が収集した日本宣教に関する記事が1冊にまとめられています。この年報は1901年に“Japan Evangelist”に吸収合併されました。なお当資料室では1898～1905年の分をマイクロフィルムに収録してありますので、御利用になる方はそちらを参照して頂ければ幸いです。

以上、これらはすべて19世紀後半から20世紀初頭の宣教誌および宣教報告です。南北戦争(1861～65)後、アメリカとくに北部アメリカに於ては澎湃として宣教熱が起り、国内ではピューリタンの情熱を燃やして伝道がおこなわれ、国外では世界各地にあまねく男女の宣教師が宣教の使命を胸に出かけてゆきました。ひとつには、女性の高学歴化が19世紀後半のアメリカにおいて著しかったこと、それにもかかわらず彼女達を受け入れる社会制度の未発達、ということがあったと思います。アメリカのメソジスト教会では女性の牧師を認めていなかったため、海外派遣女性宣教師も教会ではなく、学校や社会事業に献身したのでした。

以上の他に、“The Review of Missions”が数部(Vol.XIX～XXII・1889～1902)収蔵されていますが、Published by the Order of the Board of Missionary of Methodist Episcopal Church, Southとなっていて、アメリカ南部メソジスト教会宣教局から出版されたものです。青山学院には

初代のマクレーはじめ、主として北部メソジスト教会の宣教師がかかわっていましたから、南部メソジスト教会の史料は余りありません。関西学院は南部メソジスト教会と深い関わりがあるので、関西学院の資料室には恐らく南部メソジスト教会および宣教局関係の史料が揃っていると思います。

Year Bookの類で大量に収蔵しているものとして、次のものがあります。“The Japan Mission Year Book—Christian Movement in Japan”。これは標題が何度か変わります。最も初期のものは1903年版の“The Christian Movement, The New Life in Japan”と題して1906年まで。そして第5巻(1907)から上記の標題となります。そして“The Christian Movement in Japanese Empire” (1915～20)、“The Christian Movement in Japan, Korea and Formosa” (1921～26)、“The Christian Movement in Japan and Formosa” (1927～36)、と次々にかわり、1937年からは“Japan Christian Year Book”となって1969～70年号に至って終わります。出版社も教文館その他、時代によって変わっています。途中一時期は‘Fellowship Christian Missionary in Japan’ と副題がついています。

以上、当資料センターが所蔵するメソジスト教会の宣教誌及び宣教報告の紹介でした。次にあげるのは“Doctrines and Discipline of the Methodist Episcopal Church”。これは文字通りアメリカ・メソジスト教会の教義・規律集であって、同教会の信仰を箇条集的に表現したものです。1789年、1796年版など古いものが幾つかあり、1820年から1964年版まで揃っています。そして「日本メソジスト教会教義及條例」。明治40(1907)年に制定発行されたものがありますが、メソジスト三派合同の時に、上記の北米メソジスト教会のものを参照して制定されたものと思われます。

メソジスト教会は由来飲酒には厳しい規律をもっていましたが、この「條例」でも第一章で「特別訓諭」として禁酒が定めてあります。

禁酒といえば、当資料センターには明治時代の禁酒雑誌「国の光」(月刊・151～306号・明治39～大正7年)があります。これは禁酒運動で有名な安藤太郎氏の主宰する日本禁酒同盟が発行したもので、日本キリスト教団安藤記念教会から寄贈されたものです。面白い記事をひとつ紹介しますと「米国上院下院禁酒案を^{マア}通化せり。いよいよ来年7月より全国禁酒となる！」。なおこの他にも禁酒雑誌「禁酒新報」(明治26年6号他)、同じく禁酒雑誌「日の丸」(明治22年5～8月、1～4号、6～9号、大日本丁友会発行)があります。

以下資料室にある面白い史料をふたつ紹介します。ひとつは「箴言」。明治37年ヘンリー・ルミス編・横浜米国聖書会社発行。表紙の裏に次の句が書きつけてあります。「軍人ニ聖書ハ害アリ。然レ共聖書ハ如何ナルモノナリヤ邪蕪教ハ如何ナルモノナリヤヲ知り居ルハ将校トシテハ必要ナリ。[明治] 42年二月二十一日横浜ニ於テ求ム。H.]」

もうひとつは「各種新聞図解」の内「教会新聞第三号」の図で、「信仰の相違により新婦結婚式場より退去の図」です。「志操確乎として死を以て辞せざるに是非もなく」と注釈してあります。





三年目を迎えた相模原キャンパスの点火祭

大学主教主任 伊藤 悟



クリスマス・ツリー点火祭は学院全体の行事としては最大のもので、毎年アドヴェント（待降節）に入る直前の金曜日の夕刻に行われます。今年も、青山キャンパスの参加者が約5000名、相模原キャンパスが約3200名で、この日からイエス・キリストの降誕を迎えるための準備の期間に入ります。相模原キャンパスの点火祭にあまりなじみのない人たちもいるでしょうから、相模原の点火祭を少し御紹介しましょう。

相模原キャンパスでは授業時間との関係から、点火祭は午後4時半から始まります。そしてツリーに点灯されるのはちょうど5時頃。これが絶妙のタイミングとなります。つまり、始まる時にはまだ明るいのですが、点灯のときには真っ暗になっています。少しずつ陽が落ちて辺りが闇に包まれていき、そこに光が灯される情景は、見事に光（天地創造）、闇（墮罪）、新たな光の到来（救い、希望）という聖書の救済史を象徴的にあらわしてくれます。

相模原キャンパスの点火の順序は次の通りです。(1) 最頂点にある星、(2) ツリー全体、(3) ウェスレー・チャペルのステンドグラス、(4) 聖壇下のイルミネーション、(5) 参加者の持つケミカル・ライト。この

世に訪れた希望の光が、歴史の空間を通り抜けて、いま私たちにも届こうとしていること、そしてその用意が私たちにはある、ということをよくあらわしています。相模原キャンパスにはツリーが二本あって、点火祭の行なわれるスクエアのほかに、チャペル南側のJR横浜線の車窓からも見える位置にツリーが立っています。こちらはチャペルのステンドグラスの

ライトアップと合わせて、これからクリスマスまでの間、毎日午後10時半まで点灯されます。

第一回目と第二回目の点火祭では、試行錯誤が繰り返されました。相模原の事務局、宗教センター、デザイナー、電気工事施工業者の間で何度も協議を繰り返しました。第三回目を迎えた今年度は、これまでの反省を生かしつつ、かなりスムーズに準備も進められ、祝福のうちに点火祭を終えることができました。これからも相模原キャンパスの歩みがさらに導かれ、主イエスの降誕を迎えるにふさわしい準備を学生・教職員・市民の方々と共に整えていきたいと思えます。



カトリック関口教会

林 謙二

中等部教諭

私の所属しているカトリック関口教会は東京教区のカテドラルです。「カテドラル」とは司教座教会のことで、主日のミサは「東京カテドラル聖マリア大聖堂」で行われます。

故丹下健三氏の設計により、1964年に完成したこの大聖堂は、8面の双曲拋物（ほうぶつ）面を垂直に近く立て、地上から見ると迫ってくるような感じであり、上空から見ると前後左右に広がる十字架の形に見える、とても斬新な構造になっています。内装は全面石張り、最高部は地上から約40mと高い構造のため、“残響8秒”といわれるほど、よく響き、各種コンサートなどで頻繁に利用されています。皆さんの中にもお越しになったことのある方が多いのではないかと思います。余談ですが、一人でカデンツ（ド・ミ・ソとハモること）ができるほど響きが続きます。

小教区である関口教会は2000年に創立100周年を迎えました。主日のミサは（土）18:00・（日）8:00・10:00・12:00と4回行われます。今年の4月に司祭の異動があり、現在は立花昌和主任司祭と田村路加助任司祭、そして91歳になられた市川裕協力司祭と、三人の司祭がいらしてくださり、それぞれがとても心にしみる説教を毎日曜日にしてくださっています。

実は、私の先祖と関口教会はとても深い結びつきがあります。私の本籍地は関口教会の古い住所なのです。カトリックの司祭は妻帯できないので父や祖先が司祭をしていたわけではありません。1994年に亡くなった父からよく聞かされていた話を少し紹介します。

私の5代前の先祖は、曹洞宗の僧侶で山

梨県のある村に寺があったそうです。そこにカトリックの外国人宣教師が

訪れましたが、先祖の僧侶は村人からの「早く追い出してほしい」という依頼を受けて、宣教師と話し合いました。「このような宗教もあるのか」と納得した先祖の僧侶は宣教師を追い出さませんでした。しかし、村人たちは先祖の僧侶に対して逆上し、寺を焼き払ってしまいました。先祖の僧侶は命こそ助かりましたが、もうその村で暮らすことはできず、その宣教師と一緒に東京へ出てきて、宣教師のお手伝いをするようになったということです。その後、その宣教の拠点に関口教会ができました。

最後に、クリスマスのミサについて書かせていただきます。12月24日（主の降誕前夜）は19:00・22:00・24:00の3回で、例年所属信徒だけでなく、3000人ほどが集います。25日（主の降誕）は通常の日曜と同じ時間でミサが行われます。



カトリック関口教会
〒112-0014 文京区関口3-16-15
Tel: 03-3941-3029

幼稚園 より

楽しい行事がたくさん詰まった2学期を、子どもたちは充実して過しています。幼稚園の庭では例年にも増して秋の実りが豊かに与えられ、収穫した柿の実りは643個、銀杏は30キロ近くになりました。それぞれの学年にふさわしく成長した子どもたちと共に、神様から与えられる恵みに感謝し2学期を終えようとしています。3学期はさらに豊かな成長の時を与えられることでしょう。

始業礼拝

1月11日(水)

友だちや保育者との再会を喜び、常に守ってくださる神様への感謝の礼拝をもって3学期の歩みを始めます。

おもちつき

1月27日(金)

「よいしょ、よいしょ!」重い杵を振り上げてカー杯についた、おいしいお餅を会食でいただきます。

終業礼拝

3月13日(月)

全園児と保護者とが共に今年度の歩みを振り返り、それぞれが成長したことに感謝し、礼拝を守ります。

卒園式

3月14日(火)

3年間幼稚園で過ごし、身体も心も大きくなった年長組の子どもたち一人ひとりに、深町園長先生から卒園証書が手渡されます。喜びと感謝のうちに子どもたちが幼稚園を巣立っていきます。

(教諭 生沼晴美)

初等部 より

アドヴェントを迎え、初等部の中にもクリスマスツリーや馬小屋などの飾り付けが施されました。子どもたちと共に、それぞれの心にイエ

ス様をお迎えする準備を進めています。

聖書週間特別礼拝

10月18日(火)

聖書の御言葉が、私たちにとっていかに大切なものかを心に覚えて礼拝を守りました。

説教者は、白 正煥牧師(用賀教会)。

となり人を覚える礼拝

11月11日(金)

初等部では、10月30日からの2週間を「となり人」ということをテーマに礼拝を守っています。この時期は、25年前から行われている止揚学園への短期留学やラファエル会の訪問、また、日本聾話学校への訪問などが実施されます。

この礼拝では、年間を通して献金を捧げている日本聾話学校を5・6年生の宗教プロジェクトメンバーの有志が訪問し、そこで体験したことを全校児童に分かち合うという仕方で礼拝を守りました。

創立記念礼拝

11月15日(火)

創立131年を迎える礼拝では、藤村和義先生(渋谷教会牧師)をお迎えして説教をしていただきました。

保護者のためのクリスマス礼拝

12月9日(金)

在校生の保護者と来年度1年生になられる方々の保護者をお迎えして、クリスマスの礼拝を守ります。説教は戸波義憲先生(横浜菊名教会牧師)をお迎えします。

クリスマス讃美礼拝

12月20日(火)

初等部で50年以上に渡って同じ台本で演じられるページェントと讃美を中心にしたクリスマス礼拝です。場所は青学講堂。

(宗教主任 小澤淳一)

中等部 より

創立記念礼拝

11月4日(金)

深町正信院長を説教者としてお迎えして行

われ、説教題は「わが名が消されんために—
万代順四郎に学ぶ青山学院—」でした。

中等部祭

11月5日(土)午前10時30分～午後4時

6日(日)午後12時30分～午後4時

一般公開の行事です。今年も宗教委員会が
担当する「INGO ショップ」では、CFJ(チャイルド・
ファンド・ジャパン)とACEF(アジア・
キリスト教教育基金)から預かった絵葉書や
各国の民芸品などを販売して、これらの団体を
支援しました。

早朝祈禱会

毎週水曜日 午前7時50分～8時5分

特別な行事がない限り休まず続けられてい
ます。中等部のため、また学院全体のために
心を合わせて祈っています。

クリスマス礼拝

12月17日(土)午後2時～

ページェント形式で行われる礼拝は、聖歌
隊・聖書朗読など、あらゆる奉仕が生徒によつ
て進められます。そして、全員で歌う讃美歌。
決して変わることはないクリスマスの喜びを
確信するひと時です。

卒業礼拝

2006年3月14日(火)

日本キリスト教団梅ヶ丘教会牧師の塩谷直
也先生をお迎えします。先生は青山学院大学
の非常勤講師もされています。

中等部での3年間を感謝と共に振り返り、
新しい歩みへの心備えをする礼拝です。

(宗教主任 西田恵一郎)

高等部
より

伝道週間礼拝

10月24日(月)～28日(金)

今年の秋の伝道週間は、新しい試みで行い
ました。従来のように特別講師の説教を聞く
という形ではなく、教員と生徒の共同企画の
形で行いました。

テーマ：コヘレトの言葉3章1節

「何事にも時があり、天の下の出来事にはす

べて定められた時がある。」

毎回テーマに基づくメッセージがありまし
たが、教員と生徒による讃美、また楽器讃美、
聖歌隊讃美、卒業生(43期)宮内隆氏の独唱
と証など、新しい試みの特別礼拝を持ちまし
た。またこの伝道週間の期間に、毎朝英語で
行うモーニング・バイブルアワーを持ちまし
た。

創立記念礼拝

11月15日(火)

今年は深町正信院長が来てくださり、「愛と
平和の人 —M. C. ハリス—」と題して礼拝
説教をしてくださいました。

クリスマス合同コンサート

12月17日(土) ガウチャー記念礼拝堂

聖歌隊、オルガン部、ハンドベル部による
合同コンサートが行われます。今年もオルガ
ン部メンバーによるオルガン演奏、ハンドベ
ル部のハンドベル演奏、聖歌隊の合唱による
メサイアが上演されます。

クリスマス礼拝

12月19日(月) PS講堂

第1部の礼拝では、渡辺聡牧師(青山学院
大学非常勤講師)が「クリスマスの思い出」と
題して説教。第2部ではベアンテ・ボウマン
氏(東京交響楽団首席チェロ奏者、堺福音教
会東京チャペル協力宣教師)をお招きしてク
リスマスの祝会をもちます。

(宗教主任 坂上三男)

女子短大
より

クリスマス礼拝

12月21日(水) 13:00～14:30

青山学院講堂

説教：塩谷直也氏

(日本キリスト教団梅ヶ丘教会牧師)

天城冬の集い

2月1日(水)～2月3日(金) 天城山荘

テーマ「ともに生きる」

特別講師 船戸良隆氏(ACEF 理事)

卒業礼拝

3月22日(水) 青山学院講堂
(宗教活動委員 松本 美鈴)

大学 より

スマトラ島沖地震・インド洋津波災害被災者支援チャリティーコンサート

10月22日(土)
相模原キャンパス ウェスレー・チャペル
堀井美和子氏(大学オルガニスト)、細川幸子氏(アンサンブル・ミューズ会員)によるパイプオルガンとチェロの演奏。
合計254,323円の献金が献げられました。

ランチタイム・コンサート

10月7日(金)
相模原キャンパス ウェスレー・チャペル
越川伊豆美氏(大学オルガニスト)によるパイプオルガンの演奏

オルガニスト養成講座公開講演会

10月8日(土)
相模原キャンパス ウェスレー・チャペル
講師：飯 靖子氏(大学オルガニスト)

大学聖歌隊第24回定期演奏会

10月15日(土)
青山キャンパス ガウチャー記念礼拝堂

創立記念礼拝

11月15日(火) 説教：山田京二牧師
相模原キャンパス ウェスレー・チャペル
11月15日(火) 説教：中村民男牧師
説教：吉岡光人牧師(第2部)
青山キャンパス ガウチャー記念礼拝堂

クリスマス礼拝

12月15日(木) 説教：平野克己牧師

相模原キャンパス ウェスレー・チャペル
12月20日(火) 説教：吉村和雄牧師
青山キャンパス ガウチャー記念礼拝堂
(宗教センター事務室 平野修一)

本部 より

第21回オール青山ハンドベル・コンサート

9月23日(金) 青学講堂
クリスマス・ツリー点火祭
11月25日(金)
相模原キャンパス…16:30～
青山キャンパス……17:20～

Art・クリスマス・Aoyama

11月22日(火)～12月22日(木)
短大ギャラリー、他

講演会「戦後60年と平和」

11月24日(木)
青山キャンパス ガウチャー記念礼拝堂
講師：具志堅篤牧師、儀間良子氏
(宗教センター事務室 平野修一)

資料センター移転のお知らせ

青山学院資料センターは次のとおり、青山キャンパス、相模原キャンパスの2箇所に臨時移転いたしました。移転期間中、展示はお休みいたします。レファレンス、閲覧については利用できませんが、前もって連絡して下さい。特に青山キャンパスでの利用の場合は必ず2日前には連絡してください。

連絡先：Tel 03-3409-6742

(相模原キャンパス ダイアルイン)

相模原キャンパス：N棟4階

(内線番号は今までと同じ 11345・11346)

青山キャンパス分室：ウェスレー・ホール2階

(火曜日のみ・予約制)

編集後記

初等部では11月15日の創立記念礼拝に、渋谷教会の藤村和義先生にお話していただきました。神様から一人ひとりに与えられている使命についてのメッセージでした。その後最高学年の6年生は神様から自分に与えられている使命を考えるとときを持ちましたが、まだ分からない人が大半でした。無理もありません。イエス・キリストを土台として建てられたこの学び舎に連なる一人ひとりが、神様から与えられた「ほくの使命」「わたしの使命」を見出し、生かされることを心から祈ります。今年もイエス様のご誕生に立ち会えることに感謝しつつ。(野呂智子)

Wesley Hall News 第86号

発行 青山学院宗教センター 宗教部長 東方敬信
東京都渋谷区渋谷4-4-25
TEL.03-3409-6537 (ダイアルイン)
URL:<http://www.aoyamagakuin.jp/rcenter/index.html>
E-mail:agcac@jm.aoyama.ac.jp
編集 ウェスレー・ホール・ニュース編集委員会
印刷 万全社